

ウィーンの思い出——大江健三郎さんとの夕食会

元日本人会会長（ジェトロウィーンセンター所長） 神田 淳

ウィーンで日本人会会長をしていると、役得で、日本の著名な文化人と夕食をともにする機会などがあつた。以下はその一つである。

1997年8月、ヨーロッパ出張中の大江健三郎氏を招き、ウィーンで講演会を開いた。大江健三郎さんが近くに来られている（チェコだったか、東欧の国だったと記憶する）という情報を得たANA支店長の相馬さんが大江さんに接触し、ウィーンでの講演をお願いして実現した。ノーベル賞作家による講演会ということで、当時の日本人会文化部長の猪川さん（日本原子力研究所出身でIAEAに勤務）と相談して、講演会を日本人会文化部の行事として実施することにし、会員に案内した結果、多くの聴衆が集まり、よき講演会となった。

講演は、大江さんのご子息・光君の精神的成長の軌跡が主要な内容であつた。光君は知的障害をもって生まれたが、音楽の天分に恵まれていた。大江さんと奥様が知的障害をもつ子を育てる苦しみの中で、わが子に音楽の天分があることを発見し、これを少しずつ開花させていく体験の話であり、深い感動を与えるものであつた。

講演後は、相馬支店長の主催で、大使館の高島大使夫妻、代表部の池田大使夫妻、日本人会の猪川さん夫妻、それに私ども夫婦が大江健三郎さんを囲んで夕食会をもつた。大江さんは終始快活で、よくしゃべり、話題は多岐に及んで、高島大使、池田大使、猪川さんも活発に話され、非常に楽しい夕食会となった。

印象に残つたのが、大江さんと猪川さんとのやりとりであつた。大江さんをご存知のとおり、進歩的思想をもつ作家である。猪川さんは原子力技術の研究者であるが、非常に広い教養をもつ知識人であり、両者の知的なやりとりの中に、センスの違いが表れて面白かつた。猪川さんから感じられる思想の保守的傾向に私は共感する点が多く、ウィーンから帰国後も猪川さんご夫妻とは親しくさせていただいている。

作家・大江健三郎氏に私がずっと抱いていたイメージは、あまり面白くない（私にとって）、難解な小説を書く左翼系の文化人、というものであつたが、講演を聴いて感じた知的障害をもつ息子を深く愛する父としての大江さんと、夕食会で会話を楽しむ終始快活な大江さんを見て、今まで抱いていたイメージが少し変わったのを思い出す。私にとっては、思い出に残るありがたい日本人会のイベントであつた。



<神田 淳（かんだ・すなお）>

1995年7月～1998年3月 ジェトロ・ウィーン所長、
日本人会会長。現在 京葉ガス（株）常務取締役